「ＬＧＢＴ」隠された真実

「人権」を装う性革命

連載第１０回

◆左派マスコミの偏向報道

「負」の面を伝えない

　同性パートナーシップ制度に反対するなど、ＬＧＢＴ運動に対して少しでも批判的な発言を行うと「差別主義者」のレッテルを貼られるようになった大きな要因は、マスコミの偏向報道にあると言っていい。

　差別に苦しむ人々に寄り添った報道は大切なことだ。しかし、社会秩序の崩壊につながる運動の危険性や矛盾、そして当事者のリスクの高い奔放な性行動についても可能な限り事実を伝え、警鐘を鳴らすのもマスコミの重要な使命だが、運動の「負」の面も含めて、国民に真実を伝える報道がほとんど行われていないのは、民主主義国家として異常である。

　例えば、米国やヨーロッパにおけるレズビアン・フェミニストとトランス女性との軋轢や、「トランス女性」と自称した男性による性犯罪は海外で大きな問題となり、日本でもネット上で話題になっている。しかし、不思議なことに既存メディアはほとんど報じていない。社会変革を目論む左翼的なＬＧＢＴ運動にマイナスになるからだろう。

　また、同性カップルの「結婚式」を、愛し合った恋人同士が「愛」を成就したと好意的に報道するマスコミはあっても、男性同性間の性的接触がエイズウイルス（ＨＩＶ）感染リスクの高い行為であることを伝えて注意を促すマスコミが少ないのは、伝えないという形の情報操作である。

　その分かりやすい例を挙げる。エイズウイルス患者の新規報告を行っている厚生労働省のエイズ動向委員会によれば、二〇二〇年の新規ＨＩＶ感染者の感染経路として最も多いのは、「同性間性的接触」で全体の七十二％に達している。ＬＧＢＴ運動が活発になった影響で、ゲイの人たちがマスコミに登場、当事者の人権擁護を訴える機会が増えているが、それとは対照的に、同性愛行為がＨＩＶ感染リスクが高い行為であると警告するマスコミはどんどん少なくなっている。

　二十一年三月、同性婚を認めないのは「憲法違反」との初の判決を下した札幌地裁は、「異性愛者と同性愛者の差異は、性的指向が異なることのみ」とした。また、左派のマスコミも同じ主張を行い、同性婚を認めないのは時代遅れであるかのように報じている。

　各種世論調査では、同性婚についての賛否を問うと、半数が「賛成」と答え、若い世代ではそれが七割に達する結果も出ている。こうした国民の意識には、前述したような偏向したマスコミ報道が大きく影響しているのは間違いない。しかし、異性愛者と同性愛者の差異は、性的指向のみであるとの判断は、果たして事実と言い切れるのだろうか。この主張に疑問を持つことのほうがむしろ合理的であることを示す研究がある。

奔放で異性愛者と違うゲイの性行動

　作家の橘玲氏は二〇二〇年、『女と男　なぜわかりあえないのか』（文春新書）を上梓した。この本では米英などで行われた性愛に関する研究がいくつか紹介されている。その中に、米国の心理学者のアラン・ベル氏と同僚のマーチン・ワインバーグ氏が一九七〇年代、「独自のゲイカルチャーが花開いていた」サンフランシスコで同性愛者四百七十七人を対象に行った調査がある。

　この調査では、過去に性的関係を持った人数を聞いている。その結果は驚くべきものだった。ゲイの七割以上が一〇〇人を超え、しかも「一〇〇〇人以上」が四分の一を占めたのだ。一方、レズビアンの場合、一〇〇人は二・四%のみ。六割近くが十人未満で、ゲイと大きな違いを見せた。同じ同性愛者の間でも、ゲイとレズビアンではこれだけ違うのであり、異性愛者と比べれば、その違いはさらに大きく感じられる。

　また、この調査結果について橘氏は「ゲイが性的に奔放だという偏見（ステレオタイプ）を煽り、差別を助長するのではないかと当然のことながら批判や憤激が巻き起こったが、詳細な面接調査の結果を否定することができなかった」と述べ、調査に信憑性があることを強調した。

　ただ、ベル、ワインバーグ両氏の調査は一九七〇年代、つまりエイズ禍が米国を襲う前に行われたものだ。だから、いかに奔放な傾向を持つゲイの性行動でも、今は当時と大きく変わっている可能性もある。

　実際、この調査については、特異な“ゲイ文化”を誇っていたサンフランシスコで行われたことや、最近の大規模調査では五十人以上と性的関係を持つゲイは全体の四分の一から三分の一になっているとして、その信憑性を否定する研究もある。しかし、橘氏が「だからこそ七十年代の調査ではゲイの『純粋』な性生活が明らかになったともいえる」と解説を加えているように、エイズ禍のような事態にでもならなければ、ゲイの多くは、自分の性行動に抑制的になることは難しいと見ることができる。「エイズ感染」という高いリスクがある中で、少なくとも四分の一が生涯に五十人以上と関係を持つというゲイの性行動を考えれば、男女の性関係とは大きく異なると捉えるのは自然なことだ。

　橘氏がこの調査を取り上げた八年前にも、自著で同じ調査を紹介した研究者がいた。動物行動学者の竹内久美子氏だ。二〇一二年一月に出版した『同性愛の謎　なぜクラスに一人いるのか』（文春新書）で同じ調査結果を引用した上で、竹内氏はゲイとレズビアンの性行動の違いについて、次のように分析している。

　レズビアンの場合、異性愛の女性と同じく「慎重に相手選び」をする傾向があるのに対して、ゲイは「相手を厳しく査定する性質を持っていないので、たやすくオーケーが出る」ことから、相手の数が多くなるのだという。

　もしそうであるなら、ゲイカップルの性行動を含めて「多様な性」に寛容になることは性道徳の乱れを招くことを覚悟する必要があろう。また、男女の愛と同性愛は「同じ価値を持つ」というＬＧＢＴ運動の言い分や、この二つの間の違いは「性的指向のみ」とした札幌地裁の判断やマスコミの主張は、ゲイの性行動の実情を無視したものと言うこともできる。素人が考えても、子供が生まれる可能性がある異性間の性行動と、それが全く考えられない同性間の性行動に大きな違いが出ることは容易に推測できることではないか。

　竹内氏は十九年三月末、『同性愛の謎』の増補改訂版『フレディ・マーキュリーの恋』を出している。当然、前述の研究結果も載っている。このように、ベル、ワインバーグ両氏が行った調査は日本でも紹介されているのだから、テレビ・新聞でＬＧＢＴ問題を担当する記者やディレクターの多くはゲイの奔放な性行動について知っているはずである。しかし、この事実に言及するマスコミがほとんどないのは、ゲイ当事者のイメージを悪くし、ＬＧＢＴ運動にマイナスになると考え、読者や視聴者に伝えることを控えているとしか言いようがない。メディアの偏向はこれだけではない。

意見違う人をパージ

「ゲイのセックス経験人数は平均でだいたい三ケタだというのが私の実感」（月刊「Ｈａｎａｄａ」二〇一八年十二月号）

　ベル、ワインバーグ両氏が行った調査の信憑性を裏付けるように、かつてこう指摘したのは、ゲイであることを公表している元参議院議員の松浦大悟氏。

　かねてより左翼的なＬＧＢＴ運動を批判している松浦氏は二十一年九月、『ＬＧＢＴの不都合な真実　活動家の言葉を１００%妄信するマスコミ報道は公共的か』を上梓した。カバーの見返しに「あえて急進的ＬＧＢＴ活動家が触れたがらない不都合な真実をあぶり出し、保守の立場からの新しいＬＧＢＴ論を提唱する」とあるように、本には左翼的な運動にとってはマイナスとなる事実が多く含まれている。

　世界日報の取材に対し松浦氏は、原稿はかなり前に出来上がり出版社を探したが、なかなか見つからなかったという。出版にこぎ着けたのは、主にパソコン関係の書籍を扱う「秀和システム」が引き受けてくれたからだ。この事実を見ると、出版界でもＬＧＢＴ運動批判を自主規制する力が働いていると考えられる。

（つづく）